

主日礼拝説教「信じないから、信じる者になる」予稿

日本基督教団石神井教会 2022年4月24日

【旧約聖書日課】民数記 13章1～2節、17～33節

¹主はモーセに言われた。²「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナン土地を偵察させなさい。父祖以来の部族ごとに一人ずつ、それぞれ、指導者を遣わさねばならない。」

¹⁷モーセは、彼らをカナン土地の偵察に遣わすにあたってこう命じた。「ネゲブに上り、更に山を登って行き、¹⁸その土地がどんな所か調べて来なさい。その住民が強いか弱いか、人数が多いか少ないか、¹⁹彼らの住む土地が良いか悪いか、彼らの住む町がどんな様子か、天幕を張っているのか城壁があるのか、²⁰土地はどうか、肥えているかやせているか、木が茂っているか否かを。あなたたちは雄々しく行き、その土地の果物を取って来なさい。」それはちょうど、ぶどうの熟す時期であった。²¹彼らは上って行って、ツインの荒れ野からレボ・ハマトに近いレホブまでの土地を偵察した。²²彼らはネゲブを上って行き、ヘブロンに着いた。そこには、アナク人の子孫であるアヒマンとシェシャイとタルマイが住んでいた。ヘブロンはエジプトのツォアンよりも七年前に建てられた町である。²³エシュコルの谷に着くと、彼らは一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒に下げ、二人で担いだ。また、ざくろやいちじくも取った。²⁴この場所がエシュコルの谷と呼ばれるのは、イスラエルの人々がここで一房（エシュコル）のぶどうを切り取ったからである。

²⁵四十日の後、彼らは土地の偵察から帰って来た。²⁶バランの荒れ野のカデシュにいるモーセ、アロンおよびイスラエルの人々の共同体全体のもとに来ると、彼らと共同体全体に報告をし、その土地の果物を見せた。²⁷彼らはモーセに説明して言った。「わたしたちは、あなたが遣わされた地方に行って来ました。そこは乳と蜜の流れる所でした。これがその果物です。²⁸しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナク人の子孫さえ見かけました。²⁹ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。」

³⁰カレブは民を静め、モーセに向かって進言した。「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます。」³¹しかし、彼と一緒に行った者たちは反対し、「いや、あの民に向かって上って行くのは不可能だ。彼ら是我々よりも強い」と言い、³²イスラエルの人々の間に、偵察して来た土地について悪い情報を流した。「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食い尽くすような土地だ。我々が見た民は皆、巨人だった。³³そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。アナク人はネフィリムの出なのだ。我々は、自分がいなごのように小さく見えたし、彼らの目にもそう見えたにちがいない。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和が

あるように」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけられていたのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

八日目のイースター【こども説教のために】

イースター（復活祭）の祝いから一週間が経ち、再び教会へと集められてきました。皆さんの中に、先週の祝いに加わることができなかった方がいらっしゃるのでしょうか。そのような方には、今日、ご挨拶したいと思います、「イースターおめでとうございます」と。

最初のイースターの日、ある家に集まっていた弟子たちのところに主イエスが現れてくださったとき、弟子のひとりトマスは、一緒にいなかったのです。イースターを祝い損ねてしまったのです。その日がイースターの祝いになるなど知らなかったのですから、仕方ありません。いいえ、もしかすると、トマスは自分ひとりで、主イエスの現れてくださるのをどこかで待っていたのかもしれませんが、トマスの前にその姿をお見せになることはなかったのです。他の弟子たちは、イースターを祝ったというのに、残念な思いで一週間で過ごしたのではないのでしょうか。

そのトマスも、一週間後の「週の初めの日」に、イースターを祝う者となりました。他の弟子たちと一緒にいたからです。そこに、主イエスが現れてくださったからです。主イエスのお姿を見たトマスは、他の弟子たちと共に、主イエスのご復活を信じて日曜日ごとに集まる教会の一員となったのです。トマスに続く者を迎え続ける教会として、彼も歩み続けたのです。

「わたしたちは主を見た」

教会が日曜日ごとに集まるとき、あの弟子たちの集まりを続けているのです。主イエスの教えと実践に従おうとしてきた弟子たちの集まるところに、十字架で死なれた主イエスが現れてくださる。同じことが、今のわたしたちの集まりでも起こる。いいえ、起こっているのです。実に、わたしたちの教会でも、集まりから離れて長らく過ごして来られた一人の「トマス」が、再び集まりに戻って来られて、主イエスと共に生きる歩みを始められました。そのしるしである「洗礼」に、先週あずかられました。

教会は、日曜日ごとの集まりで、主イエスとお会いしています。もちろん、神を礼拝するために集められて来ているのです。その神の前に集められたわたしたちは、ここで主イエスとお会いしています。そのお姿を見て、確かめているのです、主イエスの教えと実践が何であったのかを。

「主イエスの教えと実践であれば、教会に来なくても、聖書を読めば理解できる」と考える方があるかもしれません。確かに、熱心に聖書を研究し、あるいは聖書について説く書物で学び、自らを主イエスに従う者と称する方が、世には一定数いらっしゃいます。わたしたちは、そのような生き方を否定する必要はありません。そのような方にも、神は導きの御手をお与えくださっているのでしょう。

ただ、わたしたちは、主イエスの教えを、わたしたちの生き方、振る舞い方、実践そのものとして聞いてきたのです。「キリスト教一問一答」で合格点を取るために、主イエスの教えを学んでいるわけではありません。「わたしがしたように、あなたがたもしなさい」とお教えくださった主イエスを模範として生きること、振る舞うこと、生涯をまっとうすることを願って、教えを学んでいるのです。それは、書物によって学ぶというよりは、模範を見ることによって習得するようになるものなのでしょう。

初代教会の弟子たちは、自分たちのことを「この道に従う者」（使徒 9:2 など）と呼んでいたと伝えられています。ひとつの「道」、「主イエスが拓かれた道」を模範として従う者たちの集まりが、教会となったのです。

あのトマスに、ほかの弟子たちは、「わたしたちは主を見た」と言って、もう一度集まりに加わるよう呼びかけました。トマスは、自立心があり独学志向の強い人だったのかもしれませんが、けれども、彼は、主を見ていませんでした。模範となったださる主を見ることが、できていませんでした。主イエスが示され、残してくださった模範を見ることのできるどころが、彼には必要でした。それは、弟子たちの集まりだったのではないのでしょうか。主イエスの模範に倣って生きる人たちの集まり、だったのではないのでしょうか。そこには、「主の姿」をした人たちがいたのではないのでしょうか。

見れば信じられる

主のご復活が何であったのか、わたしたちは、本当のところを知りません。聖書は、必ずしも明確に示してくれていないのです。少なくとも、それは、ゾンビのようなものが歩き回ることはなかったでしょう。

確かなことは、弟子たちが「わたしたちは主を見た」と語るに足る出来事を経験したということです。理性で理解したというのではなく、見る経験をしたのです。

弟子たちは、「見た」のです。彼らの集まりの中で、鍵をかけて戸の閉じられた家の中で、彼らは「見た」というのです。その「真ん中に立ち」、語り始める姿を見た、というのです。それは、あの主イエスに他ならない姿であったというのです。手に釘の跡があり、わき腹に槍で突かれた傷跡のある、あのお方の姿に他ならなかったというのです。

弟子たちは、その姿を、彼らの集まる中で見たのです。その真ん中で見たのです。いいえ、彼らは、自分たちの集まるただ中、その真ん中で、ただあのお方の姿を見ることを、願ったのでしょ。見いだすことを、求めたのでしょ。そして、そこで確かに、見たのです。彼らしかいないその場に、あのお方の姿を見たのです。あのお方が姿を現してくださっていることを、知るようになったのです。彼らのただ中に、あのお方が生きてその姿を現してくださっている。ご復活なされた。そうとしか言いようのない経験を、彼らは重ね始めたのです。

わたしたちも、同じなのです。主のご復活を、わたしたちは、自然科学者のようには説明できないかもしれません。けれども、一人の人間として、確信することはできます。聖書に伝えられている主イエスのお姿と同じ姿を、教会の集まりの中で見る経験をしてきたからです。「これは、主のお姿だ」、「主の振る舞いだ」と信じ得るものを、教会に集められる中で、見てきたからです。

わたしたちは、聖書を学びます。主イエスの教えを学び、実践を学びます。そして、わたしたちは、集められた者たちの中で、主イエスのお姿を見るのです。「主の道」を歩む者たちの中に、主の模範に倣う者たちの中に、主イエスが現れてくださっていることを、見るのです。すでに見てきたからこそ、わたしたちは、主を信じ、この道に留まっているのです。

わたしたちも、トマスを歓迎しましょう。トマスが「信じない」のは、まだ見ていないからです。見ていただきましょう。主のお姿を。わたしたちの集まりの中で。わたしたちが集まるただ中で。主の模範に倣う道を行くわたしたちの集まりの真ん中で、トマスにも主のお姿を見てもらうのです。主がわたしたちを生かし、導いてくださっている姿を、見てもらうのです。